

エコたま グリーンNEWS



多摩市民環境会議機関紙 第151号(通巻第211号)
2015年5月28日発行 発行人:清水武志朗 編集人:
井上ひさかず 連絡事務局:多摩市環境部環境政策課
☎042-338-6831 F A X 042-338-6857
e-mail qqh43tdd@train.ocn.ne.jp
URL www.ecomeetingtama.jp

日本中の「ご当地電力」を追いかけて



5月24日、一般社団法人・多摩循環型エネルギー協会の総会後の午前11時より、鶴巻6丁目の団地集会所で講演会が開かれ、ノンフィクションライターで、北海道から九州まで全国の自然エネルギーによる

スライドを使って話す高橋さん 市民発電の現場取材している高橋真樹さん(41)が日本やヨーロッパなどの実情を話した。これを阿部裕行市長を含む40~50人の市民が聴講。ここでは、そのおもな内容を再録してみよう。
3.11の大震災を機に日本中で大きな変化が起こった。いままでの仕組みを変えていかないと、と思う人が全国で運動を始めた。わたしは全国を歩いて取材したが、発電の設備そのものはどこへ行っても同じなのでおもしろくない。それよりも、それをやっている人のドラマとかコミュニティのほうがおもしろいので、もっぱらそちらの面から取材することのほうが多かった。



自分たちには遠い存在だったエネルギーというものを、自分たちの手に取り戻そうと。「このままじゃ、やばいよ」と気づかされた。

たとえば、長野県上田市の藤川まゆみさんは現在はNPO法人上田市民エネルギーの代表理事だが、4年前の震災時はかつば寿司の店員で、エネルギーとはなんの関わりもなかった。「当時は自分がエネルギーの仕事をするようになるなんて想像もできなかった」と話している。
近くの仲間を集めて再生エネを始めた。「相乗りくん」という事業を立案し、かつての養蚕農家などの大きな屋根を借り、屋根のオーナーがパネルを設置して余分なスペースができると、そこまで有効利用するために市民に呼びかけてパネルのオーナーを募集し、「相乗り」が成立するという仕組みだ。

相乗りくんの屋根と上田市民



屋根のオーナーは、ソーラーパネルの容量が増えることで初期投資を安く抑えることができ、パネルオーナーは自分の屋根には条件が合わずにパ

ネルを設置できなくても太陽光発電に参加でき、10年間で設置費用額より1割ほど多くの売電収入が得られるという。どちらにとってもメリットがあるので、佐藤弥右衛門さんと発電所



自然に再生エネが増えていく結果になる。
福島県喜多方市で会津電力を立ち上げた佐藤弥右衛門さんは200年以上続く造り酒屋の当主。原発事故で「人類がコントロールできない原発に依存するような社会を、根本的に変えていかなければならない」と考え、最初は酒蔵の屋根に太陽光パネルを取りつけた。さらに地域ぐるみでエネルギー問題に取り組んでいくために、仲間たちとともに電力会社を設立した。

弥右衛門さんがかつては「必要悪」だと思っていた福島には原発が10基も並び、発電された電力はすべて首都圏に送られていた。彼はそんな首都圏と福島の関係を「エネルギーの植民地」と考えている。そしてその構造を変えるために、地域にエネルギーを取り戻し、自立をめざそうと訴えた。

会津電力が第1弾の事業として手がけているのが太陽光発電。昨年未までに会津各地の22カ所に合計2500kWの設備を設置した。太陽光で事業を軌道に乗せたあとは、水力や木質バイオマス発電も積極的に展開していこうと計画中。

合計8億円にものぼる設備の資金は、自己資金と補助金、金融機関からの融資に加えて、市民出資で1億円ほど集めた。福島で立ちあがったエネルギー・プロジェクトを応援したいという人たちの反応は、弥右衛門さんたちが考えた以上に勢いがあり、出資金は募集するとすぐに集まったとのことだから、民意もしっかり後押しする。

プロジェクトのなかには東京電力が所有の水力発電所を購入するといった大胆なものも含まれているが、会津地方のみならず、福島県内の多くの地に自分たちのつくったエネルギーを届けようと大きな夢を描いている。



震災後の4年間で何が起きたか。プラスの面は、それ以前は一部に再福島県の市民発電所エネのことなどおもちゃ扱いする認識があったが、それが否定されたこと。いまや震災前の2倍以上の発電量となっており、さらに増加中だ。ご当地電力やPPS(特定規模電気事業者)の増加。まだ主流とはいえないが、エネルギーを自分ごとにする人、意識を持った人々は確実に増えた。

マイナスの変化は、増えたのは太陽光ばかりで、そのほとんどが植民地型なこと。政府の掲げる低い目標値。これからやるべきことは脱植民地型。太陽光以外の電源を生かす。電力の公益化、送電網の公有化、都市部でできることの工夫など。

世の中には設備をつくったことで満足している人もいるかもしれないが、設備をつくることだけが目的ではないことは、これまでの話からおわかりのはず。

(写真は高橋真樹さん提供/©岩波書店 次号につづく)

今期1回目の「まち美化キャンペーン」開催



平成 27 年度の 1 回目となる「まち美化キャンペーン」が、5 月 14～17 日に市内 4 駅周辺で行われた。今回は 5 月 30 日

の「ごみゼロデー」に合わせて行われたもので、多摩市まち美化推進協議会のメンバーのほかに、廃棄物等減量推進委員会のメンバーも合流して活動を展開された。キャンペーンが行われた場所は、5 月 14 日が聖蹟桜ヶ丘駅、同 15 日が唐木田駅、同 17 日が午後が多摩センター駅と永山駅。時間は 1 回目が 15～16 時、2 回目が 14～15 時、そして 3 回目が 13～14 時と 15～16 時。これまでのように開催時間が一定してないので、活動に参加する市民も時間の把握がむずかしかったのではないと思われる。

しかし、ふたをあけてみれば、聖蹟桜ヶ丘駅では京王電鉄のマスコット「けい太くん」がキャンペーンに参加してくれたり、永山駅では日曜日にもかかわらず聖ヶ丘中学校の生徒が副校長先生などに引率されて 40 人も参加してくれたり、小さな子どもたちの参加も各地でみられるなど、その場、その場のエポックメーカーなできごとがあり、盛り上がった。



参加人数などは以下のとおり。市民の数が聖蹟桜ヶ丘駅と多摩センター駅では 40 人台になると聖中の生徒のおかげで 70 人台に跳ね上がっていることがわかる。

・5 月 14 日 聖蹟桜ヶ丘駅 市民 47 減量委 5 市職員 7 計 59 人
・5 月 15 日 唐木田駅 市民 21 減量委 6 市職員 7 計 34
・5 月 17 日 多摩センター駅 市民 43 減量委 22 市職員 7 計 72
・永山駅 市民 71 減量委 16 市職員 8 計 95 合計人数 260 人

(写真は市環境政策課提供)

大栗川水辺まつり、別の場所で開催決定

会場の東寺方小学校前が東京都による護岸工事のため、今年（7 月 20 日）の開催が危ぶまれていた「大栗川水辺まつり」は、会場を宝蔵橋の上流に変更して開かれることになった。このため、集合場所などはこれまでどおり同小学校となる。

同水辺まつりが始まった 10 年ほど前は、ずっと上流の和田公園の脇からスタートが行われていた。しかし、漕ぐ艇が発泡スチロール製で、スチロールの細かい粒が分離して川に流されていくため、「環境によくないことをしているの



では・・・」との声が出て、浮体がペットボトルやポリタンク製に変更された。すると、今度はその場所では水深が足りず、深みのある東寺方小前に変更されていたもの。

第6回めの田んぼ造成作業

「早く 3 年前の状態に戻そう！」を合言葉に行われている連光寺 6 丁目の湿地帯に田んぼを再生する作業。最初の、現場を覆っていた腐った竹などの片づけから、すでに 5 回の修復作業が行われている。



田植えが待ち遠しい

今回は 5 月 30 日の土曜日に第 6 回目の作業が行われることになった。写真は田中さんが籾から育てている苗でよく育っていることがわかる。(撮影 5 月 20 日)

時間は午前 10 時ごろから行うが、その人の都合によって、いつから仕事に参加しても、いつ抜けてもよい。昼食や飲み物持参。長めの長靴があったら必携。作業の内容は、畦(あぜ)固め、田んぼ内の土ならし(代かき)、水路の整備など。

なお、田植えの時期は 3 年前の記録では 6 月の 2 週目ごろとのことで、今年もそのあたりになりそうだ。



→田んぼづくりは楽しいぞ！

川の生き物調査・観察会 5/31

多摩市環境行事实行委員会が主催し、多摩市水辺の楽校や当会議が協力する「川の生き物調査・観察会」が 5 月 31 日(日)に、大栗川と多摩川の合流点付近(交通公園)で開かれる。参加者は午前 9 時 30 分集合。(スタッフは 8 時 30 分)



子どもと保護者たちで賑わう

内容は大栗川の生き物調査・観察で、ガサガサをしながら川の両岸で行う。いまのところの申し込みは 50 人ほどらしいが、当日が雨天だった場合には中止になる。その場合は午前 6 時 15 分以降に環境政策課・中村主査の携帯電話(090-6512-9782)に連絡して確認すること。

多摩川カヌー体験教室が6月13～14日に

恒例の「多摩川カヌー体験教室」が 6 月 13 日(土)と 14 日(日)の 2 日間開かれる。両日もとも午前コースは 9 時 30 分～12 時ごろ。午後コースは 13 時 15 分～15 時 45 分ごろ。各組とも 50 名の計 200 名。対象は小学校 1 年生から中学 3 年生まで。場所は多摩川河畔の一ノ宮公園。参加費は保険費用の 300 円のみ(当日徴収)。主催は多摩市水辺の楽校。協力は府中市にあるあばれんぼキャンプ事務局(NPO 法人野外遊び喜び総合研究所)。公益財団法人河川財団の河川整備基金の助成を受けている。